

島根・矢野遺跡



(大 社)

出雲平野は、斐伊川・神門川の沖積作用によって形成され、平野の遺跡のほとんどが、両河川の旧自然堤防上に位置している。矢野遺跡も同様の立地にあり、弥生時代の拠点集落として著名で、島根大学によって継続的に調査されている。位置は出雲市の市街地のすぐ北、出雲平野の中央部にあたる。西には、浜山砂丘があり、その外は日本海となる。東では斐伊川が東流

- 1 所在地 島根県出雲市矢野町
- 2 調査期間 一九九〇年(平二) 五月～九月
- 3 発掘機関 出雲市教育委員会
- 4 調査担当者 川上 稔
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 七世紀～一四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

しており、矢道湖へと注ぎこんでいる。

今回の調査は、出雲健康公園(出雲ドーム)建設に伴うもので、調査面積は四〇〇〇㎡である。

調査区の遺構検出面の標高は、二・五mと低く、自然堤防の縁辺部にあたるとともに、集落の東端にあたるようである。検出した遺構の時期は、七世紀～一四世紀で、平安時代、中世を中心としており、矢野遺跡の中でも古墳時代終末以降に集落が拡張した部分と考えられる。

検出した主な遺構としては、一三世紀末～一四世紀初の屋敷地を区画する溝がある。全体を検出できなかったが、溝は方形にめぐっており、一辺が約三〇mを測る。この溝からは、常滑焼・青磁が出土しており、同じ出雲平野の荻野古墓のセットと共通しており、時期も同じである。今回紹介する木簡が出土した土坑(SK〇四)も、溝で区画された中にある。

この土坑は、南北四・二m、東西三・二mを測る不整形な楕円形を呈する。土坑は二段に掘られており、内坑では南北三・四m、東西三mを測る。土坑の壁のラインは、一段目の深さは一五cmでほぼ垂直に落ち、二段目の最も深いところで六五cmを測り、底は皿状になっている。土坑の底には、厚さ一五cmで灰白色の粘土が貼られており、その上に厚いところで二〇cmの植物層がある。この植物層は、特に編んだようなところは観察されず、敷き詰められたような状態

である。この層の中から、古銭・木製品・靱が出土しており、木簡もこの中より出土している。年代の決め手となる土器は出土していないが、木簡も前述の溝と同時期のものと思われる。

8 木簡の积文・内容

(1) ちやくのつほね

(114)×23×4 069

上部は欠損しており、上にも文字が書かれていた可能性はあるが、「ち」の上に空白部分があることから、この「ち」より一連の単語が始まるようである。「ちやく」「つほ」「たね」の三つの単語からなり、「つほ」は「坪」、「たね」は「種」のことであろう。「ちやく」については、地名の可能性が考えられる。「の田で使う種靱」という意味になろう。この木簡の出土した土坑から靱が出土していることから考えて、この遺構は、種靱の貯蔵穴で、木簡はその標に使用されたものと思われる。

木簡の积読にあたっては、島根大学法文学部井上寛司氏のご教示を受けた。



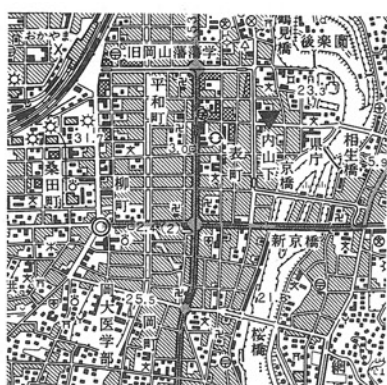
(松山智弘)

岡山・岡山城二之丸跡

おかやまじょう

- 1 所在地 岡山市丸の内一丁目
- 2 調査期間 一九九〇年(平2) 六月～八月
- 3 発掘機関 中国銀行本店建設事業埋蔵文化財調査委員会
- 4 調査担当者 乗岡 実・安川 満(岡山市教育委員会)
- 5 遺跡の種類 城下町(郭内侍屋敷跡)ほか
- 6 遺跡の年代 一五～一九世紀ほか
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、岡山城本丸天守台の南西約五〇〇mの、都心部に位置する。調査の結果、江戸中・後期の遺構群を別として、承応三年(一



(岡山南部)

六五四)とみられる洪水砂層の下で、桃山時代から江戸時代前期に至る大別三時期の侍屋敷跡を、各々山土造成層を挟んで、面的に確認し、城下町形成期の屋地の変遷を捉えることができた。

第1遺構面(仮称)は、